

# 資本主義貨幣と社会主義貨幣

武 藤 守 一

## 一 序

二 資本主義貨幣成立の基盤とその本質

三 社会主義貨幣存立の基盤とその本質

## 一、序

資本主義社会は商品生産・商品流通の社会であり、貨幣流通の社会である。この資本主義社会の否定の上に、したがって全く相対立するところの社会主義社会ソヴェト同盟にも現在やはり貨幣が流通している。その両者はいずれも同じく貨幣と呼ばれているので、恰も同一のものであるかの如く考えている人々がある。然しそれらは同じく貨幣と呼ばれながらも、本質的に異つたものである。

ところで或る人々は、社会主義社会となり生産が共同的に行われるようになれば貨幣は消滅する、と述べているマルクスおよびエンゲルスの言葉を彼等の著書から拾い出し、それと社会主義社会たるソヴェト同盟に現在も尙貨幣が厳存している事実とを対比し、これをマルクス主義の誤謬として指摘している。或る人々はまた次の如く

にもいう、ソヴェト同盟はまだ完全に社会化されていず、ブルジョア的商品生産が残存しているので、そこに貨幣残存の基盤があるのであり、その基盤が消滅するに伴ってソヴェト同盟における貨幣は消滅するであろうと。然しこれらの議論は、マルクス・エンゲルスの誤謬を指摘したことにならないし、またソヴェト貨幣の本質を把えた議論でもない。

ソヴェト貨幣の本質を把えるためには、それと本質的に異なる資本主義貨幣を適確に把えることが絶対的に必要で、その前提の上に、それとの関聯においてソヴェト貨幣の本質を把えなければならない。この意味において、まず資本主義貨幣成立の基盤とその本質について第二節に述べる。次にそれを前提とすることによって資本主義社会ではない社会主義ソヴェト同盟にも貨幣が存在しているが、それは社会主義社会にも社会主義的に容許されたものとしての価値法則が存在しているから、貨幣も亦社会主義的に容許されたものとして存在していることが理解されるのである。社会主義社会における価値法則の問題については、幾多の議論がなされたのであるが、われわれは社会主義社会における価値法則を正しく把えることによって初めてソヴェト貨幣の本質を把え、それと資本主義貨幣との本質的相違点を把え得るのである。このような方法を通じてソヴェト貨幣の本質を把えようとするのが第三節の課題である。

## 二、資本主義貨幣成立の基盤とその本質

元来、貨幣は商品生産という人間経済生活の一定の歴史的発展段階に至って必然的に生成し、さらに商品生産の発展に伴い、貨幣はその機能においても、また形態においても発展して来たのであった。貨幣は偶然に国家権

力または人間の意思に基いて成立したのではなく、商品生産という経済的基盤の成立と内在的関連において成立し発展して来たのである。すなわち、貨幣は「商品の諸関係の長い歴史的發展の産物である」(コム・アカデミア経済研究所「貨幣と信用」米村訳、一頁)のてあり、この意味において「貨幣は歴史的範疇」(同上)である。

すなわち、人間はその成立の当初から商品生産を行っていたのではなかった。人間の最初の社会経済的構成は原始共同体であって、そこにおいては極度に低い生産力に制約されて生産も消費もすべて共同に行われざるを得なかった。したがって、そこには物に対する所有観念なく、所有権のないところに交換のあり得る筈がなかった。いわゆる商品生産・商品交換はあり得ず、かかるところに貨幣成立の余地は全くあり得なかった。ミーゼスも

「財貨並に労務の自由な交換のない経済状態においては貨幣の存在する余地はない」と述べてゐる(Mises, *Theorie des Geldes*, 1.)。然しながら、やがて人間社会における生産力の發展は、最初は偶然的なものではあるが、剰余生産物を生ぜしめるに至り、それは偶然的に共同体と共同体との間に交換を生ぜしめる。さらに生産力が發展することによって、最初は偶然的な交換が次第に頻繁となり、ここに共同体間に分業を生ぜしめ、それは交換を次第に規則的恒常的ならしめる。かかる交換の發展は、まだ個人的所有観念ではなく共同体的なものであるが、所有観念を形成せしめる。この共同体間の交換の發展はやがて共同体の内部にも反作用を及ぼし、共同体内における交換を生ぜしめ、それは個人的所有観念を形成せしめる。その後における共同体内における生産力の發展は分業を生ぜしめ、それは交換の發展をもたらすのみならず、交換を規則的恒常的なものとする。それは商品生産の發展過程に外ならず、しかもその過程こそ同時に貨幣の必然的生成過程に外ならないことは後述の如くである。

原始共同体に続く奴隸制社会及び封建制社会において、特に封建制社会の後期において商品生産は益々拡大さ

れるのであるが、それは貨幣の諸機能並にそれに規定せられる諸形態を發展せしめるのであった。然し封建的社會体制においては、その本質よりして商品生産が支配的形態となり得ず、ここに貨幣の發展は一定の制約を受けざるを得なかつた。然しそれに続く資本主義社會においては、あらゆる生産が商品生産として行われ、ここに商品生産は最高の發展段階に到達し、それは同時に貨幣を機能的にもまた形態的にも充實完成せしめるのである。

そこで問題は、商品交換が發展すれば、何故に貨幣が必然的に生成しなければならないか、商品交換と貨幣生成との内在的必然性が証明されねばならない。それはマルクスがその「経済学批判」及び「資本論」において初めて完成したところである。マルクスはまず商品は使用価値と交換価値との対立的統一物であるという。使用価値とは、その物の有する自然的属性が人間の何らかの欲望を充足せしめる時、その物は使用価値であるという。交換価値とは、ある使用価値と他の使用価値との交換比率であり、それは全く偶然的なかつ相対的なものであつて、したがつてあらゆるものについて、その内在的交換価値ということは自己矛盾であるという。さらに彼はかかる偶然的な交換価値の背後にひそむ或る必然的なものを追求して、そこに価値を發見した。その実体は抽象的人間的労働であつた。したがつて諸商品の価値の大きさは、それらの生産のために社会的平均的に必要な抽象的人間的労働の量によつて規定されるとした。かくして正確には、商品は使用価値と交換価値との対立的統一物ではなく、使用価値と価値との対立的統一物であるとした。

以上の如くにして、商品の使用価値は物の自然的属性に關連するのであるから、それは全く感覺的であり問題はない。然し価値の実体は抽象的人間的労働という超感覺的なものであるから、それが感覺的に捉えられ得るものとなるためには、交換關係を通じて交換価値としてのみであるという。かくして、マルクスは価値の現象形態

としての交換価値を、論理的に最も簡単なものから複雑なものへ、それは歴史的には最も端初的なものから歴史の發展過程に即応して追求したのである。ここに所謂価値形態論が始まるのである。この価値形態論の重要性についてマルクスは、「A・スミスやリカドの如きその最もすぐれた代表者においても、古典経済学は、価値形態論をば、まったくどうでもよいものあるいは商品そのものの本質にとつては外的なものとして取扱つてゐる」と述べ、これは「古典経済学の根本的欠陥の一つ」であつたと述べてゐる（『資本論』長谷部訳、二七一頁）。

然るにマルクスにとつてはかかる価値形態の追求こそが「燦然たる貨幣形態に至るまで追跡することを、なし遂げる」ことを可能ならしめ、それによつて同時に「貨幣の謎も消滅」せしめる唯一の途であるといひ（同上、一九九頁）、それは「ブルジョア経済学によつては嘗て試みられなかつたこと」であり、また「人間の精神は二千年このかた、これを究明せんとして、果さなかつたのである」と述べてゐる（同上、一九九、二〇二頁）。

マルクスはまず論理的に最も簡単な価値形態たる、A商品がただ一つのB商品と交換され、A商品の価値がB商品によつて交換価値として示されるという関係、すなわち歴史的には最も端初的な関係から出發する。ここにおいてはA商品の価値がB商品によつて交換価値として表示され、したがつて、ここでは商品に内在的な使用価値と交換価値との対立が外在的対立となつてゐる。実は、商品の内在的対立が外在的対立となることによつて如何なる商品も初めて商品として実現し得るのである。何となれば、如何なる物も他の物との交換関係に入ることなしに商品として実現し得ないからである。然しここにおいては、A商品の価値が、したがつてそれを生産した抽象的社会的労働が、B商品によつて交換価値として、したがつてB商品そのものの自然的形態によつて、したがつてそれを生産した具体的個人的労働そのものによつて表示されるという関係にある。かかる矛盾は如何にし

て解決されるか。それは商品交換の発展それ自体のうちにおいてである。すなわち商品交換の発展は、今やA商品はただB商品と偶然的に交換されるだけでなく、C・D・E等々の諸商品と交換され、したがってA商品の価値は今やB・C・D・E等々の諸商品によつて表示されることになる。然るにB・C・D・E等々の諸商品はそれぞれ生産者を異にし、使用価値を異にした商品である。にも拘らずそれらは一個同一のA商品の価値とすべ同一のものとして等置される関係において、そこに社会的抽象的人間労働が自ら浮び上つて来るのである。しかもかかる関係の成立発展は、逆にB・C・D・E等々の諸商品の価値がただ一個同一のA商品によつて統一的に表示される関係を形成するのである。かくして諸商品の交換過程の発展は、必然的に諸商品の価値を統一的に表示する一商品を抽出せしめる過程である。然し同時に諸商品の交換過程の発展は、商品生産者自身にとつても、彼等の諸商品の価値を統一的に表示し得るものを要求せしめるに至る過程でもある。かかる要求に應ずるものとして、然し客観的にはそれは交換過程そのものから必然的に生成して来るのであるが、かかる商品が一般的等価物である。さらに交換が発展すれば、一般的等価物は特定の一商品に終局的に癒着するに至る。かかる時、その特定の一商品は貨幣商品となり、貨幣として機能するのである。

マルクスはいう、「諸商品の交換は、社会的な物質代謝すなわち私的諸個人の特殊的な諸生産物の交換が、同時にまた、諸個人がこの物質代謝において与えられたものとして受けとる一定の社会的生産関係の創造であるところの、過程である。諸商品相互の過程的な諸関係は、一般的等価物の種々な諸規定として結晶する。かくして交換過程は同時に貨幣の形成過程である」と(『経済学批判』宮川訳、五五頁)。このような商品交換の発展のうち貨幣の生成を必然的なものとするマルクスの理論についてエンゲルスはいう、「マルクスは商品と貨幣との関

係を研究して、如何にしてまた何故に、商品に内在する価値属性により、商品したがって商品交換が商品と貨幣との対立を生み出さざるをえないかを論証した」といい、このようなマルクスの貨幣理論は「最初の十全な・そして今や暗黙のうちに一般的に承認されている貨幣理論である」と述べている。（『資本論』第二卷エンゲルス序文、長谷部訳、5、四〇一頁）。

かくて、貨幣の生成は商品交換の発展のうち必然的なものとして生成して来たのである。すなわち繰返えして要約すれば、商品交換の発展は、必然的に諸商品の価値を特定の一商品によつて表示するところの一般的な等価物を客観的に形成せしめるのであり、しかもかかる商品交換の発展のうちにおかれる各商品生産者にとつては、あらゆる商品の価値を統一的に表示し得るものなしには商品生産—商品交換を行ない得ないという環境におかれ、かかるものを次第に要望するという主観的条件を形成せしめるのである。かかる客観的並に主観的条件の成熟のうちに貨幣は生成するのである。かくして貨幣の成立は主観的な人間の意思に基いて成立したのではなく、かかる主観的条件の成立こそ実は貨幣成立の客観的条件に制約されたものとして考えねばならない。したがつてこの客観的条件の分析なくして、ただ分業・交換を前提とし、物々交換の不便を除くために貨幣が案出されるに至つたという理論、またはたとえ物々交換の不便のうちに人間の意図によるのではなく自然的に貨幣は生成したという理論が如何に誤謬または不充分であるかは明らかである。

かくして、貨幣の成立は人間の主観的意図からは把え得ないばかりではなく、國家の権力的關係から把え得るものではない。メンガーもいう、「貨幣の起源は……全く自然的であつて、それが立法的な影響に帰せられることは極めて稀である。貨幣は國家の啓明、立法的行為の所産ではなく、従つて國家的權威による批准は貨幣概念

には一般に無用である。一定商品が貨幣として存立するのも経済的諸関係から生れたのであり、この際国家の影響は少しも必要ではない」と(「国民経済学原理」安井訳、二五五頁)。然しこのことは貨幣が国家と全く無関係であったというのではない。貨幣は事実上国家によって現定せられ形式づけられるものとして発達するのであるが、かかる国家の意思または行為によって貨幣が成立するのではなく、既に客観的に成立している貨幣に対して、国家が或る特定の形式づけを与えるに過ぎないのである。したがって国家意思によって貨幣が成立したのではなく、そこに貨幣の成立を把え得ないことは当然である。貨幣国家説の誤謬はここにある。

以上の如くにして、貨幣生成の謎は、商品交換の発展に伴う価値形態の発展の追求において解明されるのである、そこに成立するあらゆる商品の価値を統一的に表示するという社会的機能を担うことによって、あらゆる諸商品のうちから除外される特定の一商品としての一般的等価物のうちに貨幣本質の謎も解明されるのである。貨幣の本質的内容は一般的等価物以外の何物でもないのであるから、そしてそれはあらゆる諸商品の価値を統一的に表示するという社会的機能を担うことにあるから、貨幣の機能としてまず第一に考えねばならないのは、諸商品の価値を表示し、また尺度する機能である。然し特定の一商品が一般的等価物となるのは、突如としてなるのではなく長期にわたる交換の発展過程においてであり、その間において次第に交換媒介の機能を果すに至るところの物が一般的等価物となるのである。かくして一般的等価物は諸商品の価値を尺度するのではあるが、他面において交換媒介手段となることによって一層価値を尺度する機能を拡充し、より一層一般的等価物たるに応しく発展するのである。かかる交互依存関係において、発生論的には貨幣の価値尺度機能と流通手段機能とは同時存在であり、マルクスも「商品は、先ず、価値の尺度と流通手段との統一として貨幣となる、言い換へると、価値

の尺度と流通手段との統一が貨幣である」と述べている（「経済学批判」宮川訳、一五八頁）。然し諸商品が流通過程に入つて流通手段に出逢うためには、まず貨幣の価値尺度機能によつて価格がつけられていなければならない。この意味において、マルクスが「金の第一の機能は、商品世界に対してその価値表現の材料を提供する点、あるいは、諸商品価値をば質的に同等で量的に比較されうる同名の大いさとして表示する点にある。かくて金は価値の一般的な尺度として機能するのであつて、独自の等価商品たる金がさしあたり貨幣となるのは、この機能によつてに外ならない」（「資本論」長谷部訳、二九七頁）と述べている如く、価値尺度機能は貨幣の第一の機能である（拙著「貨幣理論と貨幣政策」第三章）。

貨幣の価値尺度機能によつて諸商品は価格をもつ。価格とは商品価値の貨幣的表現に他ならない。貨幣の価値尺度機能は、現実に貨幣商品（金）がそこにあることを必要とせず觀念的存在で充分である。然るに流通手段としては、金は現実に流通過程において商品と対立しなければならぬ。流通過程において貨幣がその機能を充分に果し得るためには、技術的に鑄貨形態をとるに至る。ところがこの鑄貨の流通過程のうちに磨滅その他によつて次第に、その名目的内容と実質的内容との分離を生ぜしめる。しかも實際上流通手段としての貨幣を受取るものは、その内容としてではなく、その機能において受取るのであるという関係において、ここに表象貨幣としての補助貨幣・紙幣等を成立せしめるのである。かくして貨幣の形態規定は、その機能から捉えねばならない。

貨幣の媒介による商品交換すなわち商品流通の發展は、各商品生産者に貨幣蓄藏の必要を生ぜしめ、一旦貨幣蓄藏が行われ始めると、自己目的としての貨幣蓄藏が行われるようになり、貨幣は価値蓄藏手段として機能する。さらに商品流通の發展は、諸種の事情からして商品の譲渡と貨幣の支払とを時間的に分離せしめ、ここに貨幣の

支払手段機能が成立する。支払手段機能の成立により、租税の如き商品流通とは無関係なものにまで貨幣が用いられ、その流通範囲が拡大する。この機能の発展のうちに銀行券等の信用貨幣形態が成立する。貨幣は流通手段または支払手段として、転々として社会をうろつき廻り、時には著蔵貨幣として退蔵され休止する。これらの流通数量は容観的に規定されるのであるが、然しそれは絶えず変動するものであるが故に、それは流通外からの蓄蔵貨幣の流出入によって調整されるのである。以上は国内的商品流通の発展過程における貨幣機能の発展並にそれに伴う形態規定を見たのであるが、国内的商品流通の発展はやがて世界的商品流通へと発展し、ここに世界貨幣が成立する。それは貨幣のこれまでの国内的形態規定を一切脱ぎすて、金地金そのものとして現われるのである。かかる世界的商品流通の発展において産業資本成立の基盤が与えられるのであり、資本主義社会が成立する。資本は価値増殖を至上命令とし、それは一定の貨幣額をもつて労働力及び生産手段を購入し、生産過程においてより大なる価値ある商品を生産し、それを販売することによって実現される。かくして資本主義社会において商品生産・商品流通は、最も発展し、かかる基盤において、資本主義社会において貨幣はその機能並に形態を最も充実に完成するのである。

以上の如くにして、貨幣は商品交換の発展のうちに内在的必然性として成立し、商品交換の全面的に行われるのは資本主義社会であるから、貨幣も亦ここにおいて最も充実に完成するのである。したがって商品生産の存続する限り、如何なる手段を以てするも貨幣のみを排除することは不可能であり、商品生産を基盤とする資本主義社会から貨幣を——貨幣流通から如何なる弊害が生じようとも——排除することは不可能である。然るに資本主義社会から貨幣のみを排除しようとする幻想が、資本主義そのものの根本的矛盾に基く弊害を貨幣流通から生ず

るかの如く表面的に觀察することしか出来出来なかつた所謂空想的社会主義者および無政府主義者によつて提案され、かつ実行されたことがあつた。然しそれは当然に理論的にもまた実践的にも破産せざるを得なかつた。これらの貨幣廢止論が如何なる根拠に基いて提案され、かつ実行されて、その結果如何なる終末をつげたかについてローザ・ルクセンブルグに聞こう。

彼女はいう、「今日の社会に於いて人々の状態に大きな差異があり、富と並んで貧困があり、しかも働かない人間が富を擁し、すべての価値を労働によつて創造する人間に貧困があるのを見るならば、これは明らかに交換の際の不正から生ずるものであり、しかも労働生産物の交換の際に貨幣が媒介者として介在しているといふ状態のおかげで生じたに違ひない。貨幣はすべての富がまことに労働に由来するということを掩いかくし、絶えず価格の変動を引き起し、従つて勝手な価格の生ずる可能性を与え、他人を犠牲にして富をかき集める可能性を与える。だから貨幣をどうかしてしまえ！」（『経済学入門』岩波文庫版、二〇五頁）というのが貨幣廢止論者の主張の根拠であつた。これらの人々として、イギリスではトムソン、ブレイ、オーウェン等があり、プロシヤではロードベ ルツス、フランスではブルードンが挙げられる。イギリスではブレイの影響によつてロバート・オーウェンが提唱者となり、ロンドンその他の諸都市に所謂『公平な労働交換のための物品市場』が設立され、そこでは商品は貨幣の媒介によらず、商品に含まれた労働時間が厳密に評価され、それに基いて交換されたのである。ブルードンもまた貨幣廢止のために、所謂『庶民銀行』の設立を提案したのであつた。然しそれは上述の如くいずれも理論的にも実践的にも破産せざるを得なかつた。破産の理由についてローザはいう、「貨幣によらない商品交換は事實上考えられない。そして彼等が廢止しようと欲した価格運動こそは、一商品の製出が少なすぎたか多すぎた

か、その商品の製出に費やした労働が必要よりも多かつたか少かつたか、或は果して適当な商品を作つたかどうかを、商品生産者に示す唯一の手段である。無秩序経済における孤立的商品生産者間のこの唯一の了解手段が撤廃されるとき、彼等は途方にくれてしまつて、聾どころか盲目にもなつてしまふ。そうしたら生産は停止し、資本主義のバベルの塔は崩壊し、廢墟となつてしまふ。故に単に貨幣を廢止することによつて、資本家的商品生産から社会主義的商品生産をつくりださうとする社会主義者の計画は全くの空想である」と(同上、二〇七頁)。

空想的社会主義者及び無政府主義者による貨幣廢止論の理論的誤謬については、マルクスが「経済学批判」において指摘しているところであるが、然しここではエンゲルスがそれよりも十年以上も前にブルードンの貨幣廢止論を「全く愚劣極まる話だ」として批判していることを引用しよう。すなわちエンゲルスは一八四六年九月十日付ブリュッセル共産主義通信委員会宛の手紙の中で、「ブルードンは無から貨幣をつくつてすべての労働者に天国を近づけてやるといふ一大計画を立てている……。さて、この世界救済案の雄大なところを聞きたまえ。要するにイギリスではずつと前からあつて十回も破産したレーバー・バザー或いはレーバー・マーケットと少しも違わない。……結局、話は、今の世の中から利潤を追い払つて、しかも利潤生産者はすべてそのままにしておくことに帰着するということ、それは全くの旅職人小唄で、一切の大工業、建築業、農業等々を初めから除外しているものであること、それはブルジョアの利益には与えることなく、ただその損失のみを負担せねばならぬということ、その他いくらでもある自明な異論を、彼は自分の尤もらしい幻想に有頂天になつて見落しているのだ。全く愚劣極まる話だ」と述べている(マルクス・エンゲルス往復書簡集「岩波文庫版、七四―七五頁」)。かくして、貨幣は商品生産の基盤の上に立つ資本主義社会に内在的必然的なものであることが、理論的にも実践的にも証明せられ

たのである。

### 三、社会主義貨幣存立の基盤とその本質

以上の如くにして、貨幣の成立は商品生産・商品交換の基盤において必然的なものであった。社会的には無数の私的生産者による無政府的生産であり、だからこそ、ここにおける商品交換は無規律のうちにおける規律としての・盲目的な価値法則に支配されざるを得ないのである。この価値法則の発展は価値形態の発展という具体的形態を採り、そこに貨幣の必然的成立過程を見たのである。したがって貨幣は価値法則の一応の完成としての・価値の具体的現象形態に他ならないのである。かくして既述した如く、貨幣は商品生産に内在的なものであるが故に不可分のなものであり、商品生産社会に他ならない資本主義社会に内在的なものであるが故に不可分のなものであるばかりでなく、ここにおいて商品生産・商品流通が最も充実するが故に、貨幣も亦ここにおいて機能的にもまた形態的にも最も充実発展したものとなるのであった。

然しながら、貨幣を機能的にも形態的にも最も充実完成せしめるところの資本主義社会は、それ自体の内在的運動法則に基いて、やがては自己を否定する要因を發展せしめ、その結果必然的に崩壊すべき運命をもつ。すなわち資本主義的商品生産は使用価値の生産が目的ではなく、価値の生産が目的であるばかりでなく、剰余価値の生産が、しかも無限の剰余価値の生産が目的である。ここにおいては各資本間に、剰余価値の生産したがって利潤の獲得をめぐる激しい競争が行われるばかりではなく、資本主義には不可避的に襲来する周期的経済恐慌の度に、基礎の薄弱な資本は没落する。かくして資本主義社会においては資本の蓄積と共に資本の集中は不可避的で

ある。ここにおいては資本の数的減少と各資本の量的増大は並行的に行われ、かかる過程は資本主義を必然的に自由競争の段階から独占の段階に推進せしめ、独占資本・金融資本を形成せしめる。然しこの過程は同時に反面においては国民の大多数を賃銀労働者化せしめるばかりではなく、彼等の生活水準は次第に低下する。かくして国内における購買力を減少せしめることによって利潤追求の余地を狭くした独占資本は、資本の投下市場としての植民地または勢力範囲の拡大を要求するに至る。資本は既に従前から原料獲得のためまたは商品販路のために植民地または勢力範囲の拡大を要求し続けたのであるが、資本の投下市場を要求するに至った独占資本の植民地または勢力範囲獲得の要求は一層強烈となる。それは対外的侵略政策の強化となり、かかる資本主義強国間の利害対立を激成し、ここに帝国主義戦争を勃発せしめる。十九世紀末葉以来幾多の帝国主義戦争が行われたが、その典型的なものは第一次世界大戦であった。帝国主義戦争はいずれも各国における独占資本の生きのびんがための窮余の打開策として行われるのであるが、然しそれは問題の打開策とはならないばかりか却って独占資本の苦悩を一層拡大するのみであった。すなわち第一次大戦を契機として社会主義ソヴェト同盟が成立し、資本主義商品市場を狭めることになった。またソヴェト社会主義革命の成功に刺激せられて、植民地・半植民地諸地域に民族解放運動、反帝国主義運動が活潑となり、それは独占資本が従来の如くそこから利潤を吸収することを困難にした。しかもそれが困難になったため資本主義社会における独占資本は労働貴族を買収する資金を失い、社会民主主義の域盤がなくなり、労働運動は活潑となり、階級闘争を激化せしめるに至った。さらに資本主義的商品市場の狭小化から遊休生産設備を生じ、それは失業人口を増大せしめそれがまた賃銀率を低下せしめる等、これらはいずれも階級闘争を激化せしめる要因となった。さらにかくして内外とも困難に直面するに至った資本主義強

国間の利害關係の対立は愈々尖鋭化せざるを得なくなる。

資本主義はかかる困難に直面して、対外的には国際協調をはかり、対内的には産業合理化を強行するなどして、また社会主義ノ同盟に対しては武力干渉を行い、各地に蜂起した革命的暴動に対しては強硬な弾圧政策を行うなどして危機を脱出することになった。かくして資本主義は一時安定期を得たものの、それは根本的打撃策ではあり得ず、否却って資本主義の矛盾を一層激成せしめ、それは従来より一層深刻な一九二九年以来の世界経済恐慌を結果としてもたらすに過ぎなかつた。この恐慌に対する克服策として、国内的には独占資本的経済統制が強化され、対外的には強国を中心とするブロック経済化が進展し、それは資本主義強国間の利害対立を尖鋭化し、それは各国ともに軍備の拡充を促進し、経済は次第に軍事化され各国の対立を一層刺激する結果となつた。他方ノ同盟における数次にわたる五ヶ年計画の進展に伴う強大化による資本主義と社会主義との対立の激化などもあつて、遂に第二次世界大戦の勃発となつた。第二次世界大戦は独占資本の生き延びる方策の必然的結果であつたが、これも亦却つて愈々困難な状態をもたらすに過ぎなかつた。すなわち戦後東欧諸国及び中国・北朝鮮は人民民主主義の方向に進み、またあらゆる植民地・半植民地における民族解放運動を一段と活潑にする結果となり、特に五億の人口を擁する中国革命の勝利は、ソ同盟の成立と共に世界的意義を有する大変革であつた。他方日・独・伊の資本主義諸国が崩壊し、フランスが弱体化し、イギリスも亦深刻な問題に直面し、ただアメリカのみが資本主義強国として残っているに過ぎない。かくして資本主義陣営は相對的にも絶對的にも弱体化した。これは歴史の必然性に他ならない。

資本主義から社会主義への進展は、資本主義に内在する必然性としてである。それは上述した如く、資本主義

の発展に伴い、生産は益、社会化するのに生産手段は益、少数資本に独占集中するという根本的矛盾の発展として、そこに種々の困難な問題が生じて来るのである。だから、この根本的矛盾の解決なくしては如何なる解決策もあり得ないのである。その根本的矛盾の解決策とは生産手段の社会化に他ならない。然し生産手段の社会化されるとき、それは最早資本主義社会ではなくして社会主義社会である。だから資本主義の根本的矛盾は自己否定においてのみ肯定されるのであり、それは資本主義から社会主義への変革過程に他ならない。この変革過程を推進するものは、生産手段の非所有者たる賃労働者階級以外にはなく、彼等による階級闘争によつてのみ実現し得るの得である。

かくして社会主義社会においては、あらゆる生産手段が当然に社会化されるが故に、そこには商品生産はあり得ない。これをマルクスは次の如く述べている、「生産機関の共有の上に立つ共同社会の内部では、生産者は自分の生産物を交換するものではない。そこではもはや、生産上に費されている労働がそのまま生産物の価値としてあらわれない。……なぜなら、いまでは資本家社会と異り、個人の労働がもはや間接に存在しているのでなく、社会の総労働の構成分子として直接に存在しているのだから」と（『ゴータ綱領批判』）。またエンゲルスはいう、「生産手段が社会によつて掌握されるとともに、商品生産が除去され、それと同時に、生産者に対する生産物の支配が除去される。社会的生産内の無政府状態は、計画的、意識的な組織にとつてかわられる」と（『反デューリング論』マルエン選集、第十四巻、四七七頁）。かくの如く、社会主義社会においては生産が商品生産としてではなく、意識的・計画的になされるのであるから、商品生産の上に成立し発展して来た貨幣は、その存立の基礎を失い消滅せざるを得ないであろうことは、上述のところからして明らかである。

既述した如く、社会主義社会には商品生産がなく、したがって貨幣は消滅するというマルクス・エンゲルスの規定と、現実の社会主義社会たるソ同盟に貨幣の現存している事実とからして、マルクス主義の矛盾の論拠とする人々があるが、それは早計である。その例として「ソ聯の社会主義計画経済は、その本来の意図である労働時間による価値計算を断念して、価格のパラメーター機能を計画の中に導入せざるを得なかったという事実は『社会的必要労働時間』というより形而上学的実体概念が現実の経済過程の理論づけの公準として具体化されること如何に困難であるかを物語る」(杉村・武藤「社会主義の哲学」一九七頁)。という議論を挙げ得る。然しかかる議論は、一方においてはマルクス・エンゲルスの言葉を機械的に解釈し、他方においては現実のソヴェト経済を観念的に理解するという、二重の誤謬を犯している。マルクス・エンゲルスの言葉は一般的抽象的規定であつて、その限りにおいては正しいのである。ただそれをそのまま現実のソヴェト経済に機械的に適用することは無理である。そこで問題は、ソヴェト経済の性格と、そこに存在するソヴェト貨幣が如何なるものとして把握されるべきかということに帰着する。そしてそれは結局社会主義ソヴェト同盟における価値法則を正しく把握することによつてのみ可能となる。

然しそれを述べる前にまずここでスターリンがソヴェト貨幣についてどのように述べているかを引用しよう。

彼は第十七回党大会において、一部の左翼理論家たちが社会主義の初期の段階ですべてに貨幣とソヴェト商業なしにやつてゆくことができるという欺瞞的な結論をひきだしたのを徹底的に批判し、「ドンキホーテのドンキホーテたるゆえんは、かれがごく初歩の生活感覚をもっていないという点にある。マルクス主義とは天と地はど縁の遠いこれらの連中は、あきらかに、わが国では貨幣がまだ長いあいだ、共産主義の第一段階である社会主義的発

展段階がおわるまでひきつづいて残るということを理解していない。かれらは、貨幣はブルジョア経済の道具であるが、これをソヴェト政権が自分の手に握り、これを社会主義の利益に適合させることによって、ソヴェト商業を全面的に発達させ、それによって生産物の直接交換の条件をつくりだそうとするものであることを理解しない。またかれらは、生産物交換は理想的に調整されたソヴェト商業の結果として、またこのソヴェト商業に交替するものとして、はじめて到来するものだということを、理解しないのである」と述べている。またスターリンは別のところで次の如くに述べている、「商業と貨幣の制度が資本主義経済の方法であるところには、問題はぜんぜんないのだ。問題は、わが経済の社会主義的要素が資本主義的要素とたたかいながら、ブルジョアジーのそういう方法や武器を資本主義的要素を克服するために所有し、そして社会主義的要素が資本主義に反対して、それを成功的に利用し、わが経済の社会主義的土台を建設するために、それを成功的に利用するところにある。だから問題は、わが発展の弁証法によってブルジョアジーのそれらの道具がはたす役割や使命が原則的に根本的に、変化し、それが社会主義に有利に、資本主義に不利に変化するところにある」と。スターリンはソヴェト貨幣の性格並に役割をあますところなく指摘している。

社会主義社会たるソヴェト同盟に貨幣が現存している事実を否定することは出来ない。然しその貨幣は飽くまでもソヴェト貨幣であつて、いわゆる貨幣ではない。ここにまず第一に、いわゆる貨幣とソヴェト貨幣との本質的相違点をはつきり認識し、ソヴェト同盟にも貨幣があるので、それをいわゆる貨幣と同一視し、両者の本質的相違点を抹殺するが如き觀念的機械的取扱いは注意されねばならない。第二に、然し兎も角ソヴェトにもソヴェトという規定されたものではあるが貨幣が厳存しているのは、そこに価値法則が現在すからであり、そこにおけ

る貨幣がソヴェト的という規定をもつことに対応して、その価値法則も亦ソヴェト的という規定された変更された価値法則として、兩者の本質的相違点をはつきりと認識し、それを抹殺する如き觀念的機械的取扱いは注意されねばならない。ソヴェト貨幣はソヴェト的という規定をもつことにおいて、いわゆる貨幣と本質的に異っているのは、それを成立せしめている基盤が異っているからである。いわゆる貨幣が盲目的運動法則としての価値法則の必然的結果であるのに対し、ソヴェトにおける価値法則は国家権力の意識的統制の下にあるのであり、かかる価値法則の必然的結果としてソヴェト貨幣が成立する。したがってソヴェト貨幣も亦意識的統制の下に計画經濟を推進せしめる有力な手段としての役割を果しつつあるのである。第三に、ソヴェト貨幣はソヴェト經濟の進展に伴うて、その性格を変化發展せしめつつある動的なものとして把えるよう注意されねばならない。

以上の三点を説明するに當つてその順序を逆にすることが便宜である。そこで第一の問題は、ソヴェト貨幣の認識にはソヴェト貨幣の歴史的發展が無視されてはならないという点である。元來流通現象としての貨幣現象は、生産の基盤との関連において把えられねばならないことはいうまでもない。ところで社会主義ソヴェト同盟が成立したのは一九一七年であるが、社会主義社会が成立すると同時に經濟が全面的に社会主義化されるものではない。スターリンはブルジョア革命とプロレタリア革命との相違点の一つとして次の如く述べている。ブルジョア革命においては革命前に既にブルジョア的生產様式が成立發展していたのであるが、これに反してプロレタリア革命においては革命前に社会主義的生產様式が成立しているのではなく——その物質的基盤が完成していることはいうまでもないが——プロレタリアート独裁権力によつて組織されねばならないと。ソヴェト同盟においても、革命によつて権力者となつたプロレタリアートは永い苦しい努力を続けることによつて、すなわち戦時共產主義

の時代、新経済政策の時代という苦難時代を経て、漸く軌道に乗った第一次五ヶ年計画から現在の第五次五ヶ年計画に至る三十五年にわたる努力が続けられることによつて、ブルジョア的なものを克服し社会主義経済を建設し得たのであつた。かくして一九三六年頃には生産額においても人口構成においても殆ど社会主義を実現し、その後ファシズムの侵略によつて大打撃を受けながらも戦後における五ヶ年計画の成功的遂行によつて、資本主義陣營の停滞性と対照的に、飛躍的に發展し今や共産主義への移行期に向いつつあるといわれる。したがつて同じソヴェト経済とはいへ、戦時共産主義や新経済政策の段階においては、まだ多分にブルジョア的商品生産的部分が残存していたのである。だから当時における貨幣と現在における貨幣とを、同じソヴェト同盟における貨幣だからとして、それらを内容的にも同一視することは絶対的に許されない。

第二の問題は、第一の問題から当然に導き出される。すなわち上述したところから明らかな如く、プロレタリアートが独裁権力を握つたとしても、その後数年間にわたつて内乱が続いたのであり、反革命軍に対しては資本主義列強から援助がなされたのみならず、直接的な軍事干渉さえ行われたのであるから、ソヴェト権力はこれを克服することに全力が注がねばならなかつた。したがつてソヴェト政権は、たとえいわゆる管制高地を掌握したとしても、それを充分に確保し得たわけではなく、しかもそれは圧倒的なブルジョア的商品生産のなかに孤立した姿であつた。このような状態において戦時共産主義が行われたのであつた。漸く内乱が終つた時には、ソヴェト経済は破滅の中にあつた。この崩壊した経済を受け継いだソヴェト政権は、これを社会主義の方向に進めるためには、まず管制高地を確保しさらに拡大すると共に、他方においてはブルジョアの商品生産を一定の限度内において許すという、いわゆる新経済政策を採用して生産の回復を図らねばならなかつた。だからこの段階にお

いては、国家権力はプロレタリアートの手中に握られ、社会主義管制高地は次第に確立されつつあったとはいえ、ブルジョアの商品生産が圧倒的であったのである。したがってブルジョアの価値法則の残存を大きく許さざるを得なかつたのであり、その限りにおいて当時の貨幣はソヴェト政権に支配されたソヴェト貨幣でありながら、多分にブルジョア貨幣の残存物的性格をもつていたのであつた。

然るに革命成立後十年を経た一九二八年から第一次五ヶ年計画が開始され、それによつてソヴェト経済の社会主義工業化が遂行され、それに続く第二次五ヶ年計画においては農業の集団化が遂行され、残存するブルジョアの要素が強力的に排除され、社会主義の方向に飛躍的に發展し得たのであつた。さらにそれに続く第三次五ヶ年計画において社会主義化は進展し、生産額の面においても人口構成においても社会主義部門が圧倒的比重を占め、ブルジョア的なものは僅かに残すに過ぎなくなつた。然しその遂行途上においてファシズムの侵略を受け、数年間の苦しい戦時経済を経過しなければならなかつた。この戦争における勝利はソヴェト経済、ソヴェト権力の優越性を実践的に証明した。戦後における第四次並に第五次五ヶ年計画の遂行によつて、戦後資本主義の一般の危機の激化とは対照的に、社会主義経済を進展せしめた。かようにして生産が全面的に社会主義化されるに至つたソヴェト同盟においては、いわゆる商品生産は殆ど消滅したのであり、そこにはブルジョアの価値法則の残存し得る余地は与えられていないのである。かかるところにはブルジョアの貨幣の残存し得る余地のないことも当然である。にも拘らず、ソヴェト同盟には貨幣が厳存している事実を否定し得ない。それを如何に解するかが最後の第三の問題である。

それは次の如く解すべきである。然しここでの問題点をはっきりさせるために、まず一つの謬論を指摘するこ

とが便宜である。それは数年前に社会主義社会における価値法則の問題が盛んに論議された時、或る人々は、社会主義社会における価値法則の残存は、ソ同盟におけるコルホーズ市場その他の如き非計画的・私的商品生産が残存しているからであるとした(鈴木「価値法則と社会主義社会」「近代経済学とマルクス主義経済学」所収、一七四―六頁、および大内・宇野等「資本論研究」二二一、二三〇―四頁)。もしこの議論の上に立てば、ソヴェト同盟に貨幣が現存するのは、ソヴェト同盟にまだ非計画的無政府的商品生産が残存し、したがって盲目的価値法則が残存するからであるということなのであるから、ソヴェト経済が完全に社会化され計画化されれば、価値法則は完全に消滅し、貨幣もまた完全に消滅するということになる。然しながら、このようなソ同盟における価値法則の規定は、ソヴェト学界において提起された価値論争とは縁のないものである。われわれが、ここで問題としなければならぬのは、社会主義社会における経済が完全に社会化され計画化されても、尙そこには価値法則が存在するのであり、それは資本主義社会における価値法則とは異つたものであることは当然であるけれども、それはソヴェト的という規定されたものとして扱えられねばならぬけれども、価値法則の存在を認めねばならず、それを如何に理解すべきかという点にある。もしソヴェト価値法則の特殊性が理解されれば、その上に成立するソヴェト貨幣の性格は容易に理解されるであらう。

かくして、ここでの問題は、①社会主義社会においてすべての生産が社会化され計画化されるに至っても、それによって価値法則は消滅するものではない、それは何故であるか、ということ、②然しその価値法則は資本主義的価値法則とは本質的に異つたソヴェト的価値法則としてである。それら両者の相違点は何であるかということ、③かかるソヴェト的価値法則が存在するからこそ、ソヴェト貨幣が存在すること、否存在しなければならぬ

いということ、以上の三点である。

社会主義社会が発展すれば、すべての生産は社会化されるのであるから、そこには商品の存在し得る余地はなく消滅するであろう。然しこの商品の消滅とは、いわゆる商品の消滅であつて、あらゆる商品形態の消滅を意味するのではない。あらゆる生産が社会化されても、生産物は単なる生産物として生産されるのではなく、それは特殊な商品・社会主義商品として生産されることを見落してはならない。それは何故であるか。それは次の如き二つの事情によるのである。第一は、あらゆる生産手段が社会化されたとしても、その社会化には二つの形態があり、現在のソヴェト同盟についていえば、国家的所有と協同組合的所有がそれである。すなわち工業的生産手段は全面的に国有化の形態を採つている。これに反して農業的生産手段は国有化形態としての国有農場も次第に発展しつつあるが、現在では協同組合的所有としての協同組合農場||コルホーズが支配的形態である。工業と農業という二大生産部門における以上の如き生産手段の所有形態の相違、したがつて生産の仕方の相違からして、それら兩者間に、いわゆる交換ではなく、社会主義的に規定されたものとしてではあるが、交換を必然的なものとして要求する。この限定された交換の存在のうちに特殊な価値法則存在の基盤がある。

第二に、生産手段が一様に国有化されている工業的生産部門においても、そこにおける国营工業企業管理方式として独立採算制(ホズラスチョート)が採られている。この独立採算制が採られているということは、工業はすべて国有国营であるけれども、各国営工業企業は一定の独立制が与えられていることを意味し、決して企業内における職場間の関係ではない。したがつて各企業間には、いわゆる交換ではなく限定されたものとしてではあるが、交換を必然的なものとして要求する。この限定された交換の存在のうちに特殊な価値法則存在の基盤

がある（副島「ソヴェト経済と価値法則」「ソヴェト研究」第一集所収、および副島「ソヴェト貨幣の機能」「資本論の解明」所収）。

社会主義国ソヴェト同盟には現在このような限定されたものとしてではあるが交換が存在するのであり、かかる交換の存在という基盤の上に限定されたものとしての価値法則が存在するのである。それは結局、まだ農業が完全に工業化されるに至らず、ここに工業労働と農業労働との質的差異が存在すること、あるいは同じ工業労働であっても、各産業部門間における労働の質的差異が存在すること、さらに複雑労働と簡単労働、知的労働と肉体労働との質的差異が存在しているところに基盤があるのである。これら諸労働の質的差異は生産力の発展に伴うて次第に解消すべきものであるが、現在の生産力の発展段階においては厳存しているのであり、かかる異質労働の存在の基盤の上に交換の必然性があるのであり、価値法則存在の必然性があるのである。然しながら、それらの生産並に交換はすべて国家権力によって意識的計画的に統制されているのであるから、ブルジョア社会における生産並に交換が全く無政府的であるとは本質的に異なるのである。かかる基盤の相違からして、ブルジョアの価値法則は盲目的法則であるが、社会主義価値法則は支配された法則なのである。

このようにして、社会主義ソヴェト同盟においてはあらゆる生産が社会化されたが、尙ソヴェト的価値法則が厳存するのであり、この基盤の上にソヴェト貨幣が存在するのである。否存在しなければならぬのである。ここに至って先に引用した如くスターリンの「一部の左翼がりやの理論家たちが社会主義の初期の段階ですてに貨幣とソヴェト商業なしにやってくることができるといふ欺瞞的な結論をひきだした」という批判が理解されるのである。ソヴェト貨幣が消滅するのは、それを必然的ならしめている諸前提が消滅しなければならぬ。それは

生産力がさらに一段と高度化することが必要であり、それが実現するに従って農業労働と工業労働、複雑労働と簡単労働、知的労働と肉体労働、これらの間の質的差異は次第に消滅し、かかる基盤の到来と共に、ソヴェト的交換も、ソヴェト的価値法則も消滅し、ソヴェト貨幣も消滅するであろう。それは社会主義から共産主義への移行過程に他ならない。かかる諸前提を飛躍して、社会主義社会の実現と共に貨幣の廃止を主張したところに左翼偏向者の誤謬があったのである。

かくして、ソヴェト貨幣の消滅は生産力の発展を前提とする。然し逆に生産力の発展はソヴェト企業を独立採算制とし、社会主義競争を刺激しつつ、国民経済全体を意識的計画的に発展せしめねばならない。この計画経済を可能ならしめるものとしてソヴェト貨幣は価値尺度・流通手段・支払手段・蓄蔵手段・世界貨幣として機能するのである。かくして、ソヴェト貨幣は、一面においてはソヴェト権力の支配の下にソヴェト経済を推進せしめる積極的役割を果しつつ、同時に他面においてはその役割を果すことによって自己の存在の基盤を消滅せしめ、自己そのものを消滅せしめる方向に進めつつあるのである。